

## 2019 年度「全国防災ジュニアリーダー育成合宿 東北」 事業報告書

- 1 趣 旨 2020 年に東京オリンピック・パラリンピックが開催されることを契機に、東日本大震災をはじめとした災害が頻発している我が国における災害やその対策の現状を世界にアピールするとともに、次代を担う人材の育成、防災意識と社会参画意識のさらなる向上を目指し、これからの防災・減災の担い手である中学生・高校生を中心とした防災会議を開催し、防災リーダーを養成する。
- 2 期 日 2019 年 8 月 17 日（土）～19 日（月）
- 3 場 所 宮城県多賀城高等学校 国立花山青少年自然の家 栗駒山麓ジオパークビジターセンター
- 4 対 象 東日本大震災被災 3 県を中心に北海道・東北・北陸・関東各方面の都道県中学生・高校生及び西日本開催担当校
- 5 参加者 89 名（生徒 63 名 引率・視察 26 名）
- 6 プログラムの内容

### 【1 日目】8 月 17 日（土）

#### I 被災地案内「まち歩き」

講師 宮城県多賀城高等学校 生徒

多賀城高校の震災後の取り組みについての説明を受けた後、多賀城高校生の案内を受けながら多賀城市内の「まち歩き」を行った。iPad で動画を見たり電柱に設置した波高表示の説明を受けたりしながら実際の被害状況について学ぶことができた。



#### II WS①「アイスブレイク」「県内活動事例の紹介」

参加者全員同士で「自己紹介」や「この合宿で学びたい事」などについて意見交流を図った。最後には他己紹介を行い、和やかな雰囲気づくりができた。また、自身の震災体験をもとに紙芝居による語り部活動を行っている加藤麻友さんらの紙芝居語りを通して、今後自分には何ができるかを考えるきっかけにすることができた。



### 【2 日目】8 月 18 日（日）

#### III WS②「多賀城高校オリジナルDIG」

講師 宮城県多賀城高等学校 生徒

助言・講評 宮城教育大学 准教授 小田 隆史 氏

仮定の街の地図上で、災害発生時にどのように避難するかについてグループ毎にシミュレーションを行った。避難経路上の危険箇所やアクシデントにどのように対応するか意見を出し合うことで、自身の視野を広げ、日頃からの準備や臨機応変に対応するための行動力が必要なことを学ぶことができた。



#### IV 基調講演（p4c）「協働で取り組む防災ジュニアリーダー活動」

講師 宮城教育大学 特任教授 野澤 令照 氏

防災をテーマにグループに分かれての話し合い活動を行った。野澤先生ファシリテートにより、自分たちで問いをつくり、対話を通して考えを深める p4c「探求の対話」を行った。参加者からは「対話によって自分の新たな学びができた。意見を交わすことは大切だと思った。」という感想があった。自分の発言が保証されることでグループの仲間の話をよく聞き、考えを広めたり深めたりすることができたものと考えられる。



## V 地学巡検 「沢活動」

講師 富山大学大学院 元栗駒山麓ジオパーク専門員 原田 拓也 氏  
栗駒山麓ジオパークガイドの皆さん

国立花山青少年自然の家の活動プログラムである「沢活動」と地震発生の原因の一つである断層の見学を組み合わせ、地震発生のメカニズムへの知見を広める学習を行った。グループに分かれて沢登りを行いながら断層によって生じた地層の「ずれ」や地すべりと関係の深い「シルト層」など地質についての理解を深めた。また、「もしも沢や山の中にいるときに大地震が発生したらどのような行動をとるべきか？」などについても考えることができた。



## VI アクションプラン作りと発表「全国・世界の、未来の高校生に伝えること」

講師 宮城県多賀城高等学校 原田 実 氏

各学校からの参加者が入り混じったグループで行った。今回の合宿で各々が考えたことを出し合い、それをもとにグループ毎にアクションプランを作成した。テーマの通り、誰に伝えるのかを明確にすることで、各グループそれぞれにメッセージ性にあふれるアクションプランを作成できた。中高生混合としたことで、中学生は高校生のより深い考えを学び、高校生は中学生に伝える作業を通じて自分の考えをより深めることができるなどの相乗効果も見られた。



【3日目】8月19日（月）

## VII ジオパーク見学「荒砥沢・駒の湯温泉」

講師 宮城県築館高等学校 生徒  
駒の湯温泉 菅原 昭夫 氏

4月から栗駒山麓ジオパークのガイド養成を受けてきた地元の宮城県築館高等学校の生徒の案内で、平成20年岩手・宮城内陸地震により発生した荒砥沢地すべりの見学を行った。クイズを取り入れながらの栗原市紹介や地すべり発生時の状況について、高校生ガイドによる対話型の説明により、参加者の理解も深まった。また、駒の湯温泉菅原氏の震災時の壮絶な体験やこれまでの復興の経過のお話には一同じっと聞き入るのみだった。



### 7 参加者の声

- ・自分達で考えたり話したりするワークショップが多く、わかりやすかった。
- ・ガイドとしての体験を通して人前で話すこと、伝えることの難しさを感じたがやりがいがあった。
- ・現場を見学し、体感できた。様々な意見を聞くことで自分の主観以外の考えを深めることができた。
- ・話し合い、体験活動のバランスも良く生徒の有意義な時間になった。

### 8 成果と課題

- ・様々な地域から参加者が集まったことで、自分とは異なる立場からの情報を得たり、意見交流をしたりすることができた。それによって、防災ジュニアリーダーとしての意識を高めることにもつながった。
- ・多賀城高校や築館高校など地元の高校生が講師を務める場が多く設定された。同世代間で交流を図りながら学びあうことができた。参加者が戻ってから活動する際のモデルとすることもできた。
- ・実際に被災した地域や関連する現場を歩くことで、知識として学んだことを深く考えたり、「もし自分だったら」という視点から考えたりすることができた。
- ・同様な企画は各地で行われているため、主催者として目指す「防災ジュニアリーダー」像を明確にしておく必要があると感じた。また、時期や開催内容等、主管校や参加校の負担増にも配慮していく必要があると考える。

(企画指導専門職 高橋英樹)